

## 山麓への旅

那 須 久 岫

## 先発を追う

待ちに待った大嶽さんのピザがとれたのでさっそくシムラ行のバスの予約に行く。ゴミゴミした所なのでなかなか見つからない、やっと見つけた所は、日本の予約センターとはほど遠い掘立小屋のような事務所である。どんなバスに乗るのかと思いバスターミナルへ行くとボディはアルミを張ってありかなり豪華である、これならさぞかし内部も立派と思いきや、どこいそうは問屋が卸さなかった。デラックスバスであるにもかかわらず、首をまげ肩をすぼめねばならない程天井が低く、なおかつイスが狭いのです。インド人は体が大きいので楽に座って行けるだろうという我々の期待は裏切られ、やむなく明日の車窓の景色に思いを託し宿へ帰る。

9月2日 いよいよ旅立ちの時がきた、七時にバスターミナルへ行くとそこはかなりの賑わいである。ターミナル脇の食堂で朝食を済ませ若干の果物を買ひ。大嶽、那須、リエゾン、通訳の四人で先発隊を追いかける。暑かったニューデリーとは違い少々の窮屈さえ我慢すれば快適である。清々しい朝の空気に小学生の頃のラジオ体操を思い出す、なんの気なしに外を見るとデリーの郊外である。人々は土手の草を一生懸命むしっていると思ったのも束の間新たな事実を発見した、土手にしゃがんでいる人は草をむしっているのではなく、なんと大キジを打っているのです。すがすがしい朝の空気に陶酔していた自分も我にかえり、しかたなく目を前に向ける。青々と繁った並木路、国道1号線をつっ走るバスの運転手はかなりの年令にもかかわらず豪快にとです、又その姿勢の勇ましいこと、チェンジレバーが運転手の左になく、左後にあるため、ギアチェンジの時は身を斜に構え、ジャリトラ顔負けのカッコよさ。パキスタンに通じる一直線の国道1号線をバス、トラックにまじり大型のトラクター、ラクダや牛の荷車が通る。アンバラで昼食後1号線に別れ、国道22号線でシムラへ向う。チャンディガールを過ぎたころより道はせまくなり山道に入る。暑い所にあるとばかり思っていたサボテンがこんな山道にあるのを不思議に思いウトウトしているとシムラがやっと見えてきた。バス停のかなり手前よりポーターが、走っているバスの窓にしがみつき必死に金属のカードを渡そうとしている。ポーターの客取り合戦である。

## シムラは西欧風の街

バス停より腰のまがった老人に案内してもらい急な坂道をハアハアしながら登り、尾根の上にあるグランドホテルに入る。ガラス窓の外にはサル進入防止用の金網が張ってあり、外を見るとサルがエサをねだりに来る。シムラはインドでも有名な避暑地で、標高 2500m の傾斜のかなりある場所で、いたる所坂・坂・坂であるにもかかわらず、インド人はここに来てブレザーやスーツを着こみ、精一杯のおしゃれをして散歩するのが楽しいそうです。我々も散歩としゃれこむ。散歩道として有名だというマールロードを歩いてそのキレイなことに驚いた。ゴミひとつ落ちていないのです。独立前は、この道でツバをはいても罰金をとられたそうです。私もタバコのすいがらすてるのにこまり、しかたこくホテルまで待ち帰ろうと思っていたら、やっとゴミ箱が見つかりヤレヤレという次第、通訳の義兄が大統領館で電気技師をしているというので会いに行くがすでに退社後であったが、帰り道偶然会い一緒に食事をする。明日彼が大統領館を案内してくれると言うので楽しみである。帰宿後、観光局長のマハジャン氏に電話をするが出かけているらしいので、挨拶は明日に延ばす。

9月3日 昨日の約束どうり大使領館の案内をしてもらおう。建築年数四年をかけ、1868年にできたそうである。内部の壁は全て木でできており、豪華なシャンデリア、エレベーターまでついている。部屋のイス等も当時そのまま、玉突き台の上には、灯を点したであろうと思われる大理石の灯台が下っていた。庭には草花が咲き乱れ、写真に撮りたい所だが、撮影禁止なので非常に残念である。恐らく一般の人には入れないであろう大統領館を日曜であるにもかかわらず案内してくれた彼に礼をのべ宿に帰る。夕方やっとマハジャン氏と連絡がとれたので、リエゾンの手配してくれた軍のジープに乗り、町外れのマハジャン宅を訪れこれからの予定を伝え、よろしく願います。

## 先発隊と合流

9月4日 ホテルで朝食を作ってもらいバスの予約センターに行くと、マハジャン氏の連絡で観光局員が、我々のために並んでくれたので、景色のよく見える前の席に座る事が出来た。シムラ～マナリ間にはデラックスバスはなく、ベンチという感じのイスに座り、苦痛の12時間のすえ夜8時マナリ着。ツーリスト・オフィサーの出迎えを受ける。マハジャン氏から連絡があったので政府のゲストハウスを予約してあると言われるが、日本人二人は他の所に拍まっているとポーターが言うので、政府のゲ

ストハウスを丁重に断り、先発隊の待っている宿に向う。たった五日間の別れであったが、なれない外国のためか非常に懐しく感じられる。

### ガソリンが売切れ

9月5日 リエゾンの手配してくれたジープで、マナリ登山学校ヘリエゾン用装備の借用と挨拶に行く。登山学校には、キャラバン用のキットバッグ（帆布製のズタ袋）があったので借用しようと思ったが、数が足りないので、リエゾンの計らいでクルの軍隊の物を借りる事にする。空輸に使った大型の Kartonボックスは、帰りの為に残して置き、キットバッグを大いに利用させてもらう。

9月6日 ワンギャルとダルマチャンドゥという二人のシェルパを雇い、インド食の買い出しに行く、インド食はどの位必要なのか判らないので、日数と人数で彼らに任せる。殆どの買い出しが終り、残るガソリンを村外れのスタンドに買いに行くが、ガソリンは売り切れたと言われ、しかたなく運送屋などガソリンを使うだろうと思われる所へ分けてもらいに行くが全て断られる。ガソリンが入手できない事も考え、ガソリン、石油両方使えるコンロを持って来たが使い馴れたガソリンが欲しい。そのうちタンクローリーが来ると言うので一日待つ事にする。

明朝ケロンまでアタを運ぶと言うトラックに隊荷の輸送をたのむ。一名しか添乗できなく、又外国人ではだめだと言うので、ワンギャルに添乗してもらい、ダルマチャンドゥはバスで行き、ケロンから先はトラクターで運ぶ事にする。

9月7日 早朝隊荷を積み込みワンギャルはトラックで、ダルマチャンドゥはバスでそれぞれ出発。

今日もガソリンが入らない、リエゾンの軍隊が明日、ガンジー首相視察警備のためにケロンまで入るので、購入・輸送は彼が手配してくれるというので彼にたのむ。

### ロータンパスを越える

9月8日 通訳に別れを告げ、いよいよロータンパス越えである。バス停はガンジー首相視察警備のため奥地に行く警官や軍人で一杯である。バスが増発され、横をこれも警備のための軍隊のトラックやジープが通り過ぎて行く。出発して一時間もしないうちに、車の長蛇の列でバスはストップ、先頭のトラックが工事中の所でスリップしている。そのうちロープを持ってきて前から引っ張り、後から押してやっと通過、我々のバスが通過したのは、停車してから二時間後、リエゾンは狭いバスがいやになったのか軍のジープに乗り換えた。

ロータンパス手前の部落マリで休憩、軍人と警官で食堂は人の入る隙間もない程で、何分休憩なのか分からない我々はウロウロしているうちに出発、結局四人とも腹に入ったものはチャイだけであった。ロータンパスは雨のため何も見えず、峠を越え中腹まで下ったところでやっと晴れる。道の脇には、チベタンが目出帽をかぶり子供まで一家総出で道路工事をしている。

夕方ケロン着、我々が着いた時はすでに全てのホテルは満員だったので、建築中のバス事務所に泊まる事にする。事務所と言っても土間のため、リエゾンが新品の毛布を軍隊から借りて来て、これを下に敷けと言われるが、新品の毛布を敷く気にはなれず断わるが、達っての彼の進めに甘んじる。水がないためバケツで水を汲んで来てくれたり、食時の時の道案内や、荷物の番など色々軍のお世話になり通しである。

9月9日 昨日、ポリスオフィスが締まっていたため、今日はポリスオフィスに行き手続きだけである。あいにく警察の親玉が外出中で二・三日しないと帰らないということで我々の要求する滞在日数は得られず10月10日までの許可をもらう。警察と言っても鉄格子がある訳でもなく部屋の外へ机を出して執務している風景はまことに悠長である。

9月10日 ケロンを出てすぐバスとすれ違う、そのバスに丁度ワンギャルが乗っていて、こちらに移って来た。彼が言うにはティロットにはポーターがいないので、ポニーを呼びに来た所だと言う。20分位乗った所で彼は降りた。

ティロット谷へ入るには、ティロット村からだと思っていたら、ティロットより歩いて一時間手前の、カムリンでダルマチャンドゥが待っていたので、慌てて降ると、ティロットからの道は悪くポニーは通れないので、カムリンから尾根を一本越えて入ると言う。幸いワンギャルは、ティロット谷へ数回入っているので大いに助かる。

茶店の二階を我々が借りたため、はみ出した家族は外で寝ているのを見ると何か悪いようである。

9月11日 午前中くるはずのポニーがなかなか来ない。茶店脇の木に登り小さな桃のような物を食べながら待つ、午後三時やっとポニーがくる。よく見るとポニーではなく大型のミュールであった。時間が遅いのでやむなく出発を明日にする。

夜、茶店の主人が来て清算をする。文字はヒンディなので、ダルマチャンドゥが英語に直し、請求書を書く。安全のため生水を飲まなかった我々は、二日間でチャイをなんと100杯も飲んでた。

出発準備のため、隊荷は道路脇に出してあったので、二人のシェルパは用心のため隊荷の上で寝るといふ。なかなか仕事熱心なシェルパである。

### ティロット谷へ入る

9月12日 昨日茶店の人のまねをして、乾し草に毛皮を敷いて外で寝た増子さんは、ノミか何かにやられたらしく、ボリボリやりながら起きてきた。70~80kgは積みめるといふミュール15頭で、いよいよキャラバンの開始。ミュールは足が速く、登り坂だといふて行けるが、平地になるとかなり速く、かけ足でないといふてもつて行けない。途中道が崩れていたため荷を下し、空荷でミュールを通過させ、我々が荷物を運び終えた時は皆ヘトヘトである。

最終部落ナンガールを少し行った所に第一日目のキャンプ。馬方にもらった大根とカリフラワーでカレーを作り、ナンガールへ帰る羊の群から二頭を購入するが、群から離れるのをいやがり、大の男が二人がかりでやっとなつて来る。

9月13日 羊をつれて行くのが思いの外大変で、一人がヒモを引っ張り、後から二人が、押したり蹴とばしたりしながらでやっとなのである。エンドモレーン手前で先に進めない本隊に一時間遅れて追いつく。ここがBCとなる、羊を追っていた時はなんともなかったのに、BC着後急に頭がガンガンしてどうしようもない、高度障害の初体験である。必死の思いでテントを張った後夕食となる。一頭の羊はレバーいためとマトンカレーにみごとな変身を遂げていた。

